



Change



社会はどうなる？

自ら学び、変わり続ける人が 変化する時代を生き抜いていく

経済や社会が大きく変わる今、これから生きる子どもたちは、どのような力をも身につけていけばいいのでしょうか。
企業経営や人材育成に詳しい、明治大学MBA専任教授の野田稔先生に伺いました。

保護者の時代との最大の 違いは、変化のスピード

前ページでもふれたように、AIや宇宙開発、空飛ぶ車、バーチャルリアリティなど、急速な技術革新はとどまるところを知りません。また、地球温暖化やそれに伴う自然災害、そして世界中を震撼させた新型コロナウイルスなど、かつて経験したことのない難しい課題に私たちは直面しています。

コロナ禍によって100年もの歴史を持つ企業が倒産したり、日本の基幹産業である自動車業界ですら、政府の「ガソリン車ゼロ」方針によって根本的な構造改革を迫られるなど、未来が見通しにくくなっています。「良い大学、良い企業に入れば一生安泰」という図式はも

はや通用しなくなっているのです。

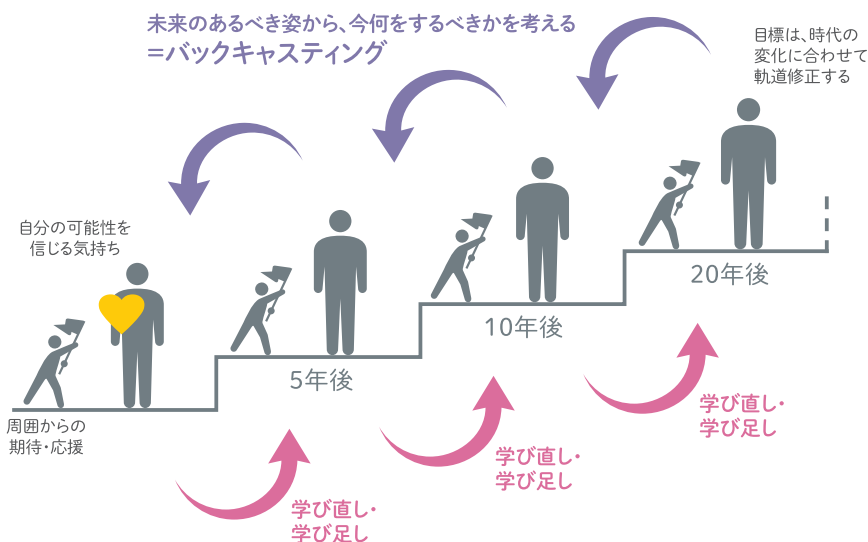
「一般的に人は安定を好み、変化を恐れたり、変化に乗ることを好まない傾向があるといわれています」（野田先生）。しかし、コロナ禍でいち早くテイクアウトサービスを始めたレストランが業績を上げている例などからもわかるように、「これからは安定志向ではなく、世の中の変化に合わせて迅速に自らを変えていくことが必要です」

「着目すべきは、変化のスピードが速くなっていること。AIも少子化もグローバル化もコロナも、そのひとつの事象。子どもたちが生きていく未来の社会でも、このような変化が次々と起こるでしょう。そのなかでは知識はすぐ古くなりますし、覚えていなくてもすぐ調

べられる。であれば、既存の知識を詰め込むよりも、変化に合わせて自分自身を変え、進化させる力のほうがよほど重要です。だから企業が求める人材も、言われたことを従順にこなす人よりも、変化を恐れず、変わり続けることができる人へと変わっているのです」

加えて大切なのは、「考える力」。今、私たちは、地球温暖化や人口爆発、環境破壊など、地球規模の課題に直面しています。未来を生きる子どもたちは、これら答えのない課題に立ち向かわなければなりません。今は、社会の枠（パラダイム）自体が変わる時代。そんななかでは、旧来の枠の中で言われたことをこなすいわゆる「ガリ勉」ではなく、過去の常

図 変化し、学び続ける力をつける



明治大学MBA
(グローバル・ビジネス研究科)
専任教授
野田 稔先生



1981年一橋大学商学部卒業。1987年一橋大学大学院修士課程修了。野村総合研究所で経営戦略コンサルティング室長等を経て2001年3月退社。多摩大学経営情報学部教授、株式会社リクルート新規事業担当フェローを経て、2008年4月より現職。リクルートワークス研究所特任研究顧問を兼任。著書：「野田稔のリーダーになるための教科書」(宝島社)など多数。



識にとらわれず、今何が問題なのか?」を発見し、自分の頭で新しい答え、新しい枠組みを創っていきける人が、これまで以上に必要とされるのです。

学校での学びも、探究学習などのように、知識詰め込み型から、課題発見、課題解決に重きが置かれる内容に変わっています。

「そんなことと大学受験に関係ないのでは、と思う人もいるかもしれませんが、むしろ、そういうところこそ、これからの社会で生きていく学びなのです」

働いたり、学んだりを 行き来しながら成長する

「欧米では、『社会に出て働く↓学校に戻って学び直す』を行き来しながらキャリアを築く人が2割を超えますが、日本では2%にも達しません」。つまり、多くの日本人は、一度就職するとそこに安住し、自分の能力をアップデイトしない傾向があるのです。

しかし、世の中が急速に変わるなか、就職するまでに身につけた

知識だけで定年退職まで走り抜けるのは困難です。「学校を出て就職したらそこで終わりではなく、社会に出てからも大学や大学院で学び直したり、資格取得のために勉強するなど、学び続けることが大変重要ですよ」

だからこそ、「高校・大学のうちにぜひ身につけておいてほしいのは、自ら学び続ける習慣です。自分で学ぶ力をつけておけば、この先世の中がどんなに変化してもそれほど苦労しません。AIに仕事を奪われるのではと不安視している人もいますが、AIは変化のひとつに過ぎません。AIなんて近い将来は米と同じくらい当たり前のものになります。であれば今からAIについて学ぶべきかと悩むよりも、いかにして学び続けるかを考えることのほうがよっぽど役に立ちます」

人生100年時代ともいわれる長寿化社会。生涯を通じて学び続けることは、仕事に必要だからというだけでなく、豊かな人生を生きるためにも必要な習慣かも

より豊かな人生を生きるために 学び続け、自分を成長させていく

しれません。

自分を信じる力と周囲の期待が学びのモチベーションに

では、「学び続ける習慣」をつけるためにはどうすればいいのでしょうか。「絶対に必要なのは、自分で自分の可能性を信じられることです。自分は成長すると信じられなければ、人は努力して学ぼう

とは思えません」

それに加えて、「周りから期待され、応援されることも必要です。いくら自分を信じてても、親や先生に『おまえには無理だ』で

きるわけがない」と言われたのでは学び続ける気持ちがくじけてしまいます」

ケーススタディ ①

仕事と学びを行き来することで 周囲の期待に応え、 自らの価値を上げていく

本田技研工業株式会社
佐藤 功さん



大学卒業後、食品メーカーに入社。営業に配属され、最初は小さな小売店から、実績を上げてだんだん大きな店舗の担当を任せられるように。8年間営業を経験した後、商品企画やマーケティングを経て、全社的な統合戦略・組織再編の仕事に抜擢されました。会社が常に、少しがんばれば手が届く適度なプレッシャーを与え期待してくれたことが、自分の成長につながっていったと思います。

しかし、経営戦略はまったく初めての分野で、これまでの経験や知識では太刀打ちできませんでした。もっと視野を広げ、自分なりの判断軸をもちたい、そのためには学ばなければと感じていたときに、上司にすすめられ大学院で経営管理学を学ぶ機会を頂きました。36歳のときのことです。日中は会社で仕事、夜は大学院に通う生活が2年間続きました。

大学院で体系的に理論を学ぶことで、これまでの実務経験が知識として整理され、とても理解が深まりました。大学時代はあまり真面目に勉強してきませんでしたが、それは

学びが自分ごとになっていなかったからだなと思います。大学院の最後の半年間で仕上げた修士論文では賞も頂きました。大学時代の成績はさんざんでしたが、自分が心から必要だと思うことなら一生懸命になれるし、結果も出せるのだと実感しました。

修士課程を終えた翌年に、ご縁があって今の会社に転職を決めました。前の会社もとても好きでしたが、今の会社の技術力やグローバルブランドを目指すチャレンジ精神に魅力を感じたからです。

現在、経営企画の仕事に従事していますが、大学院で学んだことが役立っていると日々実感します。新たな環境から学ぶことも多く、今後はファイナンスの知識もつきたいし、機会があれば海外留学もしたい。

これからは、ひとつのスキルだけでなく通用する時代ではありません。学び続けて自分の価値を上げ、自分自身をブランディングしていく意識が不可欠になっていくのではないのでしょうか。

佐藤さんの年表

- 23歳 大手食品メーカーに新卒入社、営業に配属
- ↓
- 36歳 経営戦略的な仕事に就き、知識不足に悩む
明治大学MBA(社会人大学院)に入学
- ↓
- 38歳 修士課程を修了、転職。現在(40歳)に至る

保護者も、子と共に学び 自ら変わろうとする姿を見せていく

の役に立つのかわからない」と思いながら勉強するのは辛いものです。でも、「10年後こうなっていたい」という目標があれば、「だから今はこれをしよう」と、前向きに目の前の勉強に取り組むことができるといいでしょう。ゴールを設定してやるべきことを考える方法を「バックキャストイング」といい、変化が速い今のような時代には、過去の蓄積を基に未来を考える方法（フオーキャストイング）よりも多くのことを速く実現できるといわれています（6ページ図参照）。

目標は一度設定したら終わりではなく、時代の変化を先取りし、そのときの状況や自分の能力に合わせて軌道修正していきます。「一度このような考え方を身につけておけば、社会人になってからも、20代、30代、40代と、目標を定めて学び続け、成長していくことができます。成長すればそれだけ周囲の期待も高まり、それがさらに、成長のモチベーションにつながる好循環が生まれます」。

それをした人としなかった人とは、人生も大きく変わってくるかもしれません。

保護者自身が 学び続ける姿勢を見せる

子どもが自ら学び、成長し続けるためには、保護者の期待や応援が大切です。しかし、期待はときにプレッシャーになることもありますし、高校生ともなると、保護者の応援を疎ましく感じるかもしれません。

であれば、今まさに世の中で起きている事柄について「あなたはどう思う？」と聞いてみることで、と野田先生は言います。「今のコロナの状況どう思う？」「ワクチンの仕組みってどうなの？」お母さんにわかるように教えてよ」など、身近なことでもいいのです。解決方法などわからなくても、何が問題か、課題を見つけていることが大事です。会話をきっかけに世の中の変化に敏感になり、自分で考え、意見を言葉にする力を、親子共

ケーススタディ ②

学び足した専門分野の掛け算で 自分ならではのビジネスを創る

トリプル・リガーズ合同会社
代表
丸山亜由美さん



ならできる」と励ましてくれました。働きながら美術予備校に通い26歳で武蔵野美術大学に入学。18歳の子たちと肩を並べていくらがんばっても絵の技術ではかなわない。そこで彼らとは違う武器を身につけたいと、奨学金で留学。そこで得た成果は、デザインの知識や技術以上に、学ぶことに対する価値観の違いでした。留学先のドイツでは、何度も大学に入り直し複数の学位をもつ人や社会人になってから大学院で学ぶ人が多く、日本では「無謀だ」と笑われた私の経歴を皆、「素晴らしい」と応援してくれたのです。

美大卒業後は、身につけた私ならではの「医療」と「デザイン」をテーマに起業しました。今は健康管理するアプリやイベントなどの企画・制作をビジネスにしていますが、今後はそれに食を加え、医療×デザイン×食のビジネスを展開していきたい。そのために、イタリアの大学で食について学ぶつもりで準備中です。「あなたならきっとできる」と応援してくれた両親にはとても感謝しています。

テレビドラマで臨床検査技師という仕事を知り、顕微鏡でがん細胞を見つける職人技に憧れました。臨床検査技師を目指し、猛勉強して大学進学しましたが、そのころには、ドラマで見て憧れた職人の手仕事の多くはロボットがする時代になっていました。学ぶ目標を失い、本を乱読していたときに原研哉氏の『デザインのデザイン』という本と出会い、「人生が二度あるなら美大で学びたい」と思うほどデザインの世界に傾倒しました。でも、両親にも申し訳なく、留年することなく卒業。その後、外資系の医療機器会社に就職。しかし、周囲は院卒生や帰国子女ばかり。取り柄のない私は営業で成果を上げるしかないと思い、2年でトップセールスに。それでも、英語ができない私にグローバルで活躍できるチャンスは回ってきません。20歳のときに糖尿病を発症し、「自分が思ったよりも長生きできないかも」と思っていたこともあり、夢を先延ばしにせず、美大に挑戦しようと決意しました。周囲は皆、大反対。母だけは「あなた

に育てていきましょう。

そして、保護者自身が学び続ける姿勢を子どもに示すことも重要です。自らのキャリアについて語るのもよいでしょう。「キャリア」というと過去の実績のことだと思いがちですが、本来は、「これから自分はこうしたい」という未来

志向であるべきです」。例えば、

今は子育てで忙しくても、「これから資格を取ってこんな仕事にチャレンジしたい」と夢を語り、「働くことを通して志(≡三)を実現していく成長プロセス」を保護者自身が示すことが、何より子どもの心に響くのではないのでしょうか。

丸山さんの年表

- 18歳 臨床検査技師を目指し猛勉強。北里大学に入学
- ↓
- 22歳 大学を卒業し就職。2年でトップセールスに
- ↓
- 26歳 夢だった美大に挑戦し学び直し。留学にも挑戦
- ↓
- 31歳 大学を卒業し起業。さらにイタリアで学ぶため準備中

photo:©2020 Taniguchi Daisuke